

巻頭エッセイ

疑問のもてる答 (棋士・木谷實)

一般財団法人民事法務協会 監事 佐藤 努

それは突然のことだった。小学校高学年になる孫が将棋を覚えたいと言いだしたのだ。どうも嗜む友人ができたようだ。ついでに囲碁もどうだろうか誘ってみると、囲碁にも興味を示した。思い起こせば私自身も囲碁将棋を覚えたのは小学生のときだった。保管してあった道具の埃を払いながら、私はあることを思い出していた。

私が最も囲碁に興味があった昭和50(1975)年前後には、手厚くて読みが早く「大竹美学」「早碁の神様」と評される大竹英雄、冷静で計算が正確無比なことから「石田コンピュータ」と評される石田芳夫、攻めが厳しく、大捕物が目を見張らせ「殺し屋」と評される加藤正夫、盤面中央に大模様を張り「宇宙流」と評される武宮正樹等々、全く棋風の異なる若手棋士たちが華々しく活躍していた。一方、鋭い手を放つ「カミソリ坂田」こと坂田栄男、豊かな着想を見せる「華麗・秀行」こと藤沢秀行、後に「昭和の碁聖」と評される天才棋士・呉清源などの古参棋士も健在だった。

唯一放送されていたNHKの囲碁番組を観ていると、対局時とは異なり、感想戦で棋士たちがふと漏らす本音の一言や、解説者として出演したときに勝負所で言い放つ辛辣でありながらもユーモアに富んだコメント、また進行係と交わすユニークな遣り取りが大変面白かった。これらの言動から

滲み出る人柄や豊かな感性を知るに連れ、私は囲碁が好きになっていった。

そんなある日、あることに気付いた。大竹、石田、加藤、武宮、その他にも趙治勲や小林光一など個性豊かな若手棋士たちが、皆、棋士・木谷實の弟子であることを知ったのである。弟子は当然に師匠に似た棋風になると認識していた私には、大変不思議に思われた。数十年の歳月を経て、孫の相手をしながら、私は改めて木谷實という棋士が知りたくなった。

木谷實は、明治42(1909)年1月25日に父十作、母菊江の長男として兵庫県神戸市に生まれている。父十作は理髪業を営んでいたが大変な囲碁好きで、大正7(1918)年には、9歳になる木谷を久保松勝喜代4段(当時)の通い弟子にしている。久保松は大学を中退して独学で棋士になった経歴を持つ人物で、巨漢で豪放磊落、大声で天真爛漫、大模様を得意とする棋風であった。名伯楽でもあり、弟子の指導や育成方法でも旧習にとらわれず開放的で、ことのほか久保松が評価されていることは、多くの優秀な弟子を育てながら、それを自分の膝下に留めず、惜しげもなく東京へ送り出したことである。木谷は久保松の考えを「自分は関西にあって捨て石となり、優秀な素質の持ち主を発掘して東京に送り出す。それ

が関西碁界のためであり、ひいては全碁界のためなのだと、硬く心に決めておられたのでしょうか。」と述懐する。更に久保松は弟子の送り出す先を、当時、碁界の二大主流だった本因坊派（江戸時代から続く家元の1つ。）と方円社（明治時代になり、過去の系列に拘らず棋士に参加を呼びかけて設立された。）の、どちらにも片寄せないという気の配り方であった。自分の弟子が両派にいれば、将来、碁界が大団結するときに、かならずや推進力となるに違いないと、そういう雄大な夢を描いていたからであったという。久保松は、大正10（1921）年、12歳になる木谷を東京にある方円社の鈴木為次郎6段（当時）の内弟子にするのであった。久保松と木谷の直接の師弟関係は僅か3年ほどで終わるが、久保松の考え方・生き方は木谷のその後の人生に大きな影響をもたらしたと私は感じている。人生の師となる人物は突然現れ、接した期間の長短に関わりなく大切なものを残してくれる。

大正12（1923）年9月、10万人超の死者・行方不明者を出す関東大地震が起き、首都圏は壊滅状態、棋士たちは家財も積古場も失ってしまった。この棋士の窮状を救うべく政財界人が立ち上がり、また棋士たちも大団結して、大正13（1924）年5月、日本棋院が創設されたのである（本年は日本棋院創設100年に当たる。）。初代総裁は牧野伸顕（伯爵、大久保利通の次男。）、副総裁は大倉喜七郎（帝国ホテルの会長を務め、ホテルオークラや川奈ホテルなどを立ち上げた。札幌にある大倉山ジャンプ競技場も建設している。）。創設時の棋士は、名人・9段に本因坊秀哉、8段に中川亀三郎、7段は空位、6段に鈴木為次郎ら8人、5段に久保松勝喜代ら7人、4段以下は25

人の計42人であった。木谷は初段として参加している。

日本棋院により開催された初の公式手合い（対局）で、木谷は13勝1敗の好成績をあげ、昭和元（1926）年春には2段に、夏には3段にとスピード昇段していく。このように木谷の活躍は元号が昭和に変わると共に始まっている。18歳になった昭和2（1927）年3月には4段に昇段しているが、木谷の初段から4段までの公式手合成績は133勝35敗3ジゴと桁違いの勝率であった。また昭和2（1927）年に行われた東京日日新聞の「新進打切棋戦」では10人抜きを演じ、一躍世間の注目を集め「怪童丸」との異名が付くほどであった。更に日本棋院と棋正社（棋院から除名された雁金準一7段などによって結成された。）との院社対抗戦では8連勝を演じて碁界の話題をさらっている。

さて、ここで木谷と同時代に活躍した天才棋士・呉清源について触れておきたい。呉についてはご存知の方も多いことと思う。呉は、1914年に現在の福建省で父・呉毅、母・舒文の三男として生まれている。生家は代々塩を商う素封家で、父・呉毅は2年間日本に留学するが、学校へ行くより方円社で碁を打っている時間が多かったというほどの囲碁好きであった。帰国に際して多くの棋書や棋譜を持ち帰り、これらは全て呉に与えられたという。呉は猛勉強し、北京ではプロの初段格をきりきり舞いさせるほどの棋力になっていった。たまたま北京に立ち寄った日本のプロ棋士に先番でその実力を示し、瀬越憲作7段は驚くべき天才棋士現ると賞賛、是非とも日本に引き取りたいと思ったという。呉の母は、呉が病弱であることや言葉の問題などから渡日には消極的であったが、棋院副総裁の大倉が

生活費等を全面的に援助することになり、昭和3年(1928)10月、漸く家族と共に来日したのである。呉、14歳のときであった。

来日した呉は、試験手合として打った秀哉名人との2子局などに勝利して、飛付3段として日本碁界にデビューする。当時の日本の若手棋士では、正に木谷が抜群の強さを誇っていたので、世間では天才少年呉対怪童丸木谷という対局を大いに期待していた。その2人の対局が昭和4(1929)年6月に実現した。世間の耳目を集めるこの対局で黒を持った呉は、第1手を誰もが予想だにしない天元(盤面中央)に打ち、以後63手まで真似碁(相手が打った手に対し天元に点对称な場所へ打つこと。)をしたのである。後に、初手天元について呉は、「一つの趣向」であり天元の価値を確かめる目的で打ったと説明している。対する木谷は、天元の黒石が全面的に白の勢力を威圧していることに驚き、その対策に苦慮しつつも最終的には3目勝としている。呉の真似碁に対する世間の評判はすこぶる悪かったが、対局する2人の間には信頼関係が醸成され、以後、呉は木谷をライバルではなく兄のように慕うのであった。碁に取り組む2人の自由な着想が共鳴したのではなかろうか。この後2年間木谷に勝てなかった呉であるが、4年後には戦績も並ぶようになり両者ともに5段に昇段するのであった。

昭和8(1933)年は、木谷にとって公私ともに大きな節目の年と言える。昭和6(1931)年に柴野美春と結婚した木谷は、この年に東京滝野川区に住居を構え、神戸から両親を呼び寄せている。3月に第1子長女・和子が誕生。その5日後には1人目の内弟子・武久勢士を迎えるのであ

た。木谷、弟子取りのスタートである。棋戦では、世間が注目する木谷・呉の十番碁が開始された。十番碁の手合割(対局する両者の技量差をなくすための条件。)は、当初は互先(交互に黒番。)で始まるが、4つ負け越すと先相先(3局中2局で黒番。)に、更に4つ負け越すと定先(常に黒番。)に変更されていくもので、対局者間の技量差が明確になるものであった。プロ棋士としては絶対に負けたくない対局である。

ところで、この十番碁の合間を縫って、木谷は呉を招き、静養のために妻美春の実家である長野県の地獄谷温泉に出掛けるのであった。この地で2人は「型にはまらない自由な碁を打ってみよう」と議論を重ね、ついに画期的な「新布石」という考えに到達するのである。「新布石」とは何ぞや。そもそも囲碁は、黒石、或いは白石を持った対局者同士が、四角い碁盤上に引かれた縦横各19本の線(路)の交点(361箇所)に、交互に一石ずつ打ち合い、それぞれの石が囲った交点の数(これを「地」という。)で勝負を競う陣取りゲームである。勿論、「地」の大きい方が勝者となるが、「地」を囲むには、隅では2辺、辺では3辺、中央では4辺が必要となる。従って石数の効率性から、布石(序盤での石の配置。)では、先ず2子で隅を堅め、次に辺へ展開し、最後に中央へと流れる石の運びが自然の流れとされ、絶対不変の真理と言われていた。この江戸時代から約300年間営々と築き上げられてきた「地」に固執し第3線(碁盤の端から3本目の線。)に逼塞していた従来の「隅と辺の碁」を重視する布石から、「中と勢の碁」を重視する布石に脱皮しようとするものであると評されている。「新布石」には立体感とスピードを盛り込んだ斬新さがあった。「新布石」の評価について、素

人の私の説明では覚束ないので代わりに川端康成の一文をご紹介させて頂きたい。

「木谷實、呉清源の新布石の時代は、二人の若い天才の青春時代であったにとどまらないで、実にまた現代の碁の青春時代であった。新布石は青春の創造と進取と冒険との情熱の炎を燃やし、碁界そのものを鮮麗絢爛な青春とするかの新風であった。」と評している。「新布石」に対する碁界全体の興奮が伝わって来ようである。

木谷と呉は、同年秋の日本棋院大手合において「新布石」で好成績（一等呉、二等木谷。）を取めている。翌昭和9（1934）年1月には「囲碁の革命・新布石法」（木谷、呉、安永一の共著。）を出版する。同書は10万部の大ベストセラーとなり、碁を知らぬ者まで木谷、呉の名を口にするほどであった。なお、十番碁は同年2月、呉より先に木谷が6段に昇段し手合が異なってしまったことから、3勝3敗で打ち切りとなっている。

昭和10（1935）年秋の大手合で木谷は2等に入り、翌11年（1936）、当時の事実上の最高段位である7段に昇段するのであった。日本棋院の高段者には名人・9段に本因坊秀哉、8段は空位、7段に瀬越憲作、鈴木為次郎、加藤信の3人がいるのみであった。同年2月25日に7段昇段披露祝賀会が銀座で開催された。気付かれた方もおられると思う。翌2月26日残雪の中2.26事件が起きている。日本は暗い時代に突き進んでいく。

昭和12（1937）年、日本囲碁史にとって大きな出来事が起こる。1月に、最後の世襲本因坊秀哉名人が引退を決意し、名人最後の争碁である引退碁を打つと公表されたのである。秀哉名人は、本名を田村保寿、明治7（1874）年、東京に生まれている。

11歳で方円社に入門して碁士修業を始め、碁風は怪力無双、明治41（1908）年34歳のときに第21世本因坊秀哉となっている。その後、時々の争碁を勝ち抜き、6年後の大正3（1914）年に名人に推戴され、在位23年、「不敗の名人」として碁界に君臨していた。引退碁の挑戦者は当時の第1実力者とするべく、先ず6段の碁士（久保松勝喜代、呉清源など）9人によるトーナメント戦を行い、同トーナメント戦を勝ち抜いた2人に7段碁士4人を加えた6人で改めてリーグ戦を戦い、その勝者を挑戦者とするようになった。足掛け2年を要した挑戦者決定戦は、翌年4月、木谷がリーグ戦を5戦全勝し挑戦者に決まったのである。

引退碁の手合割は木谷の先番とし、持ち時間は破格の各40時間、対局中は外部との接触を絶つため旅館に缶詰になること、打ち掛けの際には次の手を紙に書いて封じ立会人が保管、再開時に開示するという方法が採用されることになった。この封じ方は今となれば当然のことだが、それまでは必ず名人が打ち掛けを決めていた（対局の中断は名人の判断に任せられ、多くは名人手番のときに打ち掛けとしていた。）。今回の封じ手のやり方は、名人が初めて経験するものであった。木谷は引退碁の挑戦者を務めることについて、誠に光栄であるとし、「大名人が打たれる最後の勝負碁。たとえ名人が完璧に打たれようとも相手となる自分がまずい手を打てば、それは自分ひとりの失敗ではなく名人をも汚すこととなります。悔いのない碁を全力で打つつもりです。」と、引退碁の間、秋の大手合を休場し、他の碁戦も一切打たずに取り組むのであった。

歴史的対局である引退碁は、昭和13（1938）年6月26日から芝公園内の紅葉

館において始まった。木谷 29 歳、秀哉名人 64 歳。解説は呉、観戦記は川端康成が担当した。当初は 5 日ごとに対局を進めることになっていたが、対局を重ねるに連れ、心臓を病んでいた秀哉名人の衰弱が目立ち始め、頬にはむくみが出、階段を昇るにも肩で息をするような状態になっていった。8 月から 3 か月間、聖路加病院に入院している。思うように対局は進まず、14 回の打ち掛けを挟み、打ち終わったのは同年 12 月 4 日であった。紆余曲折を経ながら約半年を要した壮絶な引退碁は、「不敗の名人」秀哉が敗れ、木谷の 5 目勝ちで終わった。全身全霊で取り組まれた為であろう、秀哉名人は引退碁から約 1 年後の昭和 15(1940)年 1 月に静養先の熱海で亡くなっている。なお、本因坊の名跡は日本棋院に譲渡され、タイトル戦としての本因坊戦が開始されることになった。引退碁では挑戦者になった木谷であるが、残念ながら第 1 回本因坊戦は勝ち抜けなかった。

観戦記を担当した川端は、既に「伊豆の踊子」「雪国」などの名作を発表し、新感覚文学の旗手と謳われていた。愛棋家としても知られ、有段の棋力があり、観戦記には他からの原稿依頼を全て断って取り組むのであった。川端の観戦記は、対局光景や勝負師の表情・動作・心理などを流暢な筆致で活写し、あたかも文学作品とも言えるもので、観戦記の最高傑作と評されている。この観戦記をもとに、数本の短編小説を書き綴り、それらをまとめて小説「名人」として発表している。「古い日本への挽歌」とも、「名人のうちに、この世ならぬ『真実』で『無垢』な、没我の境にある純粋な人間の姿を発見した」とも様々に評される珠玉の作品で、そのなかに次のような一文を見付けた。

「打ち切りでない碁は、黒の手で打ち掛けにするのが、昔からの習わしだった。上手にたいする礼讓である。(中略) すべてせせこましい規則づくめ、芸道の雅懐もすたれ、長上への敬恭も失われ、相互の人格も重んじないかのような、今日の合理主義に、名人は生涯の最後の碁で苦しめられたと言えぬでもなかった。碁の道でも、日本、あるいは東洋古来の美風はそこなわれて、なにもかも計算と規則である。(中略) 勝ちさえすればいいという戦法が先きに立って、芸としての碁の品や味を思うゆとりもなくなって来る。」

碁界では先の黒番に利があることは明白で、黒番の下手はこの利を生かすように打ち、白番の上手は培った技量により黒番の利を凌ごうと打つ。かつては白番と黒番の上下関係は強く意識され、下手は上手に礼を尽くし、一局を通じて碁を教えて頂くといった心構え、しきたりがあったのである。川端は、純粹に碁に没入する名人に敬尊の念を抱き、また自らを重ね合わせつつ、変わりゆく碁界、日本に哀惜を込めているように思われる。

秀哉名人の引退碁から 1 年、木谷と呉は碁界の 2 大スターになっていた。この両者の雌雄を決するべく、再び十番碁が鎌倉の建長寺などで打たれることになった。今日、「鎌倉十番碁」として有名である。長い碁界の歴史においては、対局中や対局後に吐血したりする例もあるが、木谷はこの十番碁の第 1 局で鼻血を出し昏倒している。ヨミに没頭すると血圧が上がる傾向にはあったが、それほどの激闘であった。体調不良でもあったためか、木谷はスタートから 1 勝 5 敗と負け越し、呉に先相先に打ち込まれてしまうのである。この頃の木谷の碁について、呉は、「木谷さんの碁風は何度か

極端に変わったことでも有名である。私が来日した頃は、地に辛い（陣地の確保・拡大に主眼を置く碁。（注）筆者）ガッチリした碁風であった。それが、新布石の頃には、極端に位の高い勢力の碁に変化した。そして、秀哉名人との引退碁の頃から、再び地に辛い碁となり、私との鎌倉十番碁の頃には、極端に位を低く構える碁風になっていた。」と述べている。棋士の碁風（碁風）は、天性から備わった資質によって、大きく変化をするものではないと言われており、木谷のように碁風が二転三転した棋士は珍しい。しかし、この変化する碁風こそが木谷の碁風なのではなかろうか。木谷の碁は、常に変化し続け、斬新で独創的であったと評されている。

昭和19（1944）年、木谷は招集され入隊、短期間ではあるが朝鮮に出征している。除隊後、一家は山中湖畔に疎開。昭和20（1945）年敗戦となり平塚に戻るものの自宅は空襲により焼失していた。1人の棋士として木谷の人生を顧みると、木谷が大いに活躍したであろう30歳代の時期と戦争の時期が重なっていることが残念でならない。

戦後、新聞に囲碁欄が復活するのは昭和21（1946）年1月、大手合の復活は同年4月である。終戦直後の碁界は、大手合、呉清源十番碁、そして本因坊戦を主軸として回転していく。本因坊戦以外のタイトル戦が創設されるのは、まだまだ先である。では、その間、棋士はどのような生活を送っていたのであろうか。「今日のように多くのタイトル戦がない時代ですから、棋士たちは後援者やひいきの人たちに指導碁を打つのが大きな収入源でした。木谷先生はよく旅（巡業）をされました。それだけ人気があったのです。最も長い旅は、家を出て

3ヶ月も帰らなかったそうです。」と大竹は回顧している。事実、昭和21年（1946年）1月から22（1947）年5月までの1年5ヶ月の間に、およそ130日以上は地方に出向いていたとのことである。

呉との対局で鼻血を出したように木谷は若い頃から血圧が高く、更に何度か脳溢血でも倒れている。1度目は昭和29（1954）年2月、旅から帰宅した翌日に突然倒れた。医者から碁を打つことを厳禁されるが、1月半の入院生活を含む1年半の闘病生活の後、奇跡的に復活する。久し振りに碁が打てる喜び、また闘病生活が良き休養となったのか、昭和31（1956）年には21勝6敗1ジゴの好成績を収め、12月に9段に昇段している。8段になってから14年振りの昇段である。しかし、その後、昭和32（1957）年は23勝9敗2ジゴ、昭和33（1958）年は30勝16敗1ジゴ、昭和34（1959）年は16勝20敗1ジゴと、時を経るに連れ、また対局数が増加するに連れ成績は下降していく。疲労が重なったためか血圧が上がり、昭和34（1959）年には家人が付き添って血圧を測りながら対局する事態になっていたという。タイトル戦としては昭和35（1960）年、第7回NHK杯争奪囲碁選手権戦に優勝したのが最後となった。昭和38（1963）年の本因坊戦リーグ戦で2度目の脳溢血で倒れ、意識不明3日、1月半の入院となってしまう。一時的に再復帰するも、血圧上昇が止まらないような状態であった。昭和43（1968）年、59歳のときにプロ十傑戦に参加するが、これが公式戦最後の対局であり、この年現役を引退している。

棋士・木谷實の現役時代を駆け足で辿ってみたが如何であったろうか。ただ、木谷が評価されていることは現役時代の戦績や

功績だけでは決してない。始めに触れたように棋風の異なる大勢の、しかも優秀な弟子を育成したことを忘れてはならない。後半は弟子の育成方法などについて辿ってみることにしたい。

木谷が全国の後援者やひいきの人たちを訪ねて指導碁を打っていたことは前述したとおりであるが、その目的は単に家族や弟子たちの生活の糧を得るためだけではなく、行く先々で碁才のありそうな子どもを発掘しては、内弟子として引き取っていたのである。木谷は、「私自身が久保松、鈴木の両先生ほか、たくさんの師や先輩のお世話になり、ことに鈴木先生のところでは、十年も内弟子をさせていただいた。私が弟子の面倒をみるのは、恩返しをする気持ちなのです。」が口癖だったと言う。木谷の弟子取りは昭和8年(1933)に始まり、以来日本だけでなく韓国からも、また性別も問わずに受け入れている。通い弟子も併せると約70人が入門し、入段した棋士(プロ棋士)だけでも50人以上に及び「木谷門」と呼ばれていた。

プロ棋士となった者を入門した年ごとに整理してみると、昭和8(1933)年が3人、昭和9(1934)年が2人であるが、その後、昭和10年代で8人、20年代で6人と多くはない。日本が大戦の渦中にあったことや、戦後の食糧難などが影響しているであろう。世情が安定し経済復興が進んできた30年代には19人と大きく増加する。ただ、前述したとおり木谷は昭和29(1954)年に脳溢血で倒れている。それにも拘わらず弟子を多く取ったことについて、木谷は「現役の棋士としてはもう無理だろう。最後のひとがんばりで弟子を育てよう」と考えたと説明する。久保松の考え方が影響しているのであろうか、この木谷の決意と行動に

は驚かされる。昭和38(1963)年に再び脳溢血で倒れるが、昭和40年代には15人を入門させるのであった。なお、木谷道場は昭和12年(1937)から平塚にあったが、弟子たちの交通の便を考慮して、昭和36(1961)年に四谷三栄町に引っ越している。

プロ棋士を育成するには弟子の年齢は低ければ低いほど良いと、木谷は考えていた。木谷門の6傑と言われる大竹、石田は9歳で、加藤は12歳で、趙は6歳で、小林は12歳で、武宮は15歳で入門している。その後、入門から5年程で入段を果たすのであった(武宮は入段後に入門。)

ここで、大竹英雄と趙治勲の入門時に係るエピソードが面白いのでご紹介したい。

大竹は、昭和17(1942)年、現在の福岡県北九州市に生まれる。昭和26(1951)年12月、木谷が棋戦立ち会いのため九州に出向いた際、めっぽう強い少年がいるというので試験碁を打ったのが大竹少年であった。大竹少年は9子置いてぼろ負けし、辺り構わず号泣した。これを見た木谷は、「9子も置いているのに、上手をみな殺しにきた。なかなか元気があっていい。それに泣きっぷりもよろしい。うちへ来てみないか。」と誘い、留守宅の美春夫人には「天才少年を発見、目下交渉中。」という電報のような葉書が届いたとのことである。それからたった11日後に、大竹少年は夜行列車で20数時間揺られて平塚の木谷道場にやって来て入門、内弟子生活を始めた。小学校3年のときであった。「あっという間の出来事でした。」と大竹は振り返る。平塚駅では、美春夫人ほか木谷家の人々が出迎えた。当時の木谷家は、7人の子どもや内弟子たちがいて大所帯だったという。

趙は、1956年韓国釜山市に生まれ、4歳の頃に碁を覚えたという。既に来日して木

谷道場に入門していた叔父・趙南哲や兄・趙祥衍が縁となって、昭和37(1962)年8月、6歳の時に韓国から来日して入門、内弟子生活を始めた。勿論日本語は話せなかった。外国からの、しかも6歳の子供の入門には驚かされるが、きっと趙南哲や趙祥衍が入門年齢は低いほどよいと言っている木谷の言葉を聞いていたのであろう。来日翌日、「木谷一門100段突破記念大会」が開催され、趙は呉門下の林海峯と5子局で公開早碁を打っている。文句なしの完勝で、やんやの喝采を浴びた。解説の安永一が、「オギャーと生まれて6年、碁を覚えて2年、恐るべき天才です。」と絶賛した。その後趙は12年間内弟子生活を送っている。

木谷道場での日課は、朝6時起床、直ぐに棋譜並べをし、その後ラジオ体操、7時30分から朝食、8時には学校へ向かった。午後3時に帰宅、おやつを食し、スポーツ(野球やソフトボール)に興じた後、5時から夕食、そして6時から9時まで対局(内弟子同士のリーグ戦)と検討会を行い、10時就寝であった。このような生活を10歳前後の子どもが、来る日も来る日も続けるのである。真冬でも朝6時に起床し古碁や新聞碁を一局並べるが、寒いときは悴んだ手を息で温めながら並べたとのことである。この苛酷とも言える内弟子生活にあっても、誰1人、帰りたいと駄々を捏ねる者はいなかったという。

さて、木谷は集めた弟子を如何にして育成したのであろうか。

驚いたことに囲碁や将棋の世界では、「弟子が師匠に打って貰うのは2度しかない。3度あったらお仕舞いだ。」と言われていたとのことであった。1度目の対局は入門のときの試験碁、2度目の対局は弟子が初段になったときのお祝いの碁、そして、も

し3度目の対局を打つとすれば、それは弟子が碁士を断念するときの送別の碁になるというのである。何番も指導碁を打って弟子を育成するものと考えていた私には甚だ意外だった。勿論、すべての師匠たる碁士が同じ考えではないだろうが、碁界の師弟関係には、昔からそう言ったしきたりがあったようだ。従って、プロをめざす弟子たちは、師匠に3回目の碁を打たせないよう厳しい修行に必死に励むのであった。

木谷も指導碁をほとんど打たなかった。たまに道場に来て、弟子同士の対局をただ眺めているだけで、声を荒げたりすることは勿論、「こう打つべきだ」などとは一切言わないのである。碁の打ち方は自由であり、いろいろな考えがある。自分の考えにない手を見ると却って「それも一局の碁か」と嬉しそうに笑っていたのであった。一時囲碁碁士を目指した三男・正道は、父は子どもの可能性に対して、非常に寛容な心と温かな眼差しを持っていたと述べている。

木谷は、子どもの頃から明確な一つの答を導き出す算術よりも、囲碁が好きだったと言う。その理由は、「碁にも『答』はありましよう。いや必ずあるべきだと信じますが、それは到底われわれの手に負えないものなのです。われわれはこれが答ではないだろうかといった程度のものを出しているに過ぎないと私は思っています。この『疑問のもてる答』、こうしたものをひどく好む性質を一面にもっている私でした。」と述懐している。この『疑問のもてる答』を好む性格が、継続する探求心を醸成し、創造性を育み、過去にも囚われず変化も厭わないのではなからうか。盤面に没入する情熱、二転三転する棋風、木谷の言動の根源は、正にここにあるように私には

思われる。木谷は弟子たちに向かって「究めても究めきれないことに打ち込んでいるお前たちは、本当に幸せだ」と繰り返し論ずるのであった。

自ら弟子を持つことになった小林は、木谷はああしろ、こうしろとは言わずに「子どもの個性を尊重するのです。それがなかなかできないことで、ついつい影響力のあることを言ってしまうものです。先生は自分の考えを押しつけず、弟子とも一緒に研究しようという姿勢でした。」と回顧する。57歳の若さで逝去した加藤は、生前、「木谷門下はみんな棋風が違うでしょ。それは木谷先生が弟子それぞれの個性を大事にするという方針だったから。自分が弟子を持つとわかるけれど、つい、教え込んでしまうのだよね。多種多様な個性が育ち、それぞれが一流になっていること。それだけでも木谷先生の偉大さがわかるよね。」と懐かしむ。

大竹は、木谷の指導に対して「木谷先生の大きさはすごいものがあります。人には一生懸命忠実に努力する能力が備わっており、人は皆それぞれ社会に必要とされているのだということを言葉ではなく、日々の振る舞いや囲碁に対する姿勢で諭されたと感じています。一億総先生と思って、私だって俺だってと思って努力する。相手が素晴らしければ素晴らしいほど、負けないように努力をし、限らない頂上を目指して人間を磨く。ただし、決しておごらず謙虚でいなさいと、そういう育て方をしていただきました」と感謝する。「石心 囲碁棋士・大竹英雄小伝」の著者・井口幸久は、同書の「著者あとがき」で「これが『大竹美学』だと言うつもりはないが、私が感動したのは『矛盾の中に真実がある。』という言葉だった。」と大竹の言葉を紹介している。

大竹は木谷との出会いから、この言葉に辿り着いたのであろう。

ここで、木谷實の棋士人生を献身的に支えると共に、木谷道場における日々の生活の基盤を作り出していた美春夫人にも触れておきたい。

美春は、明治43(1910)年1月生まれ。実家は地獄谷温泉の「娯楽館」である。地獄谷温泉は温泉に入るニホンザルが有名で、志賀高原の北西部に位置する。2人は昭和6(1931)年10月に結婚し、3男5女(次女は妖逝している。)に恵まれ、美春は育児と弟子たちとの生活に忙殺されていくのであった。弟子たちが朝起きる頃には、すでに食事の支度を始めていて、夜は遅くまで縫い物などをしていた。道場全般を束ね、弟子たちからは「お母さん」と慕われていた。「自分の子どもがたくさんいる中で、よくよその子どもを大勢育てられましたね。」と問われる都度、美春は、「みんな自分の子どもだと思って育ててまいりました。」と答えている。そして弟子とその親に対して「内弟子に決まる経路はいろいろでした。(中略)無理に言われて来た人はないようで、むしろ進んで来た感じを受けました。子どもが誰も知らない人の中へ一人ぼっちで入って行く、考えてみれば、よく決心できたものです。(中略)そのことがご両親についても言えます。毎日、あれやこれやと手をかけてやりたい子どもがいなくなる淋しさを、どのご両親もいやというほど味わってこられたと思います。大勢のお弟子のお世話ができましたのは、何よりも親御様が心から信頼して下さったお陰です。」と、まだ幼い頃に入門してくる弟子たちに敬意を表するとともに、送り出す両親の心情をも慮って心からの感謝の気持ちを表わしている。

道場での生活で弟子たちを叱るのも美春の役割だったが、美春の叱り方（諭し方）は愛情に満ち満ちていた。昭和42（1967）年に入門した小林覚が碁の勉強をする時間に遊んでいると、「並んで座らされ、こんこんと1時間。『勉強しなさい』のひとことでもいいはずなのに。一生懸命勉強するのが大事というのを、ゆっくりゆっくり教えてくれるのです。」と懐かしみ、昭和36（1961）年に入門した宮沢吾朗は、「一生でも時間は足りないんだよ。」と諭された言葉が忘れられないと感謝するのであった。

美春が道場を維持していく上で、特に苦労した時期は敗戦からの数年間ではなかろうか。昭和20（1945）年10月、疎開先から平塚に戻り、焼け残った物置を改造した粗末な家に住むことになる。食糧難の時代にあっても、10歳前後の食べ盛りの弟子たちや子供たちのために、安価で、かつ栄養価の高い食事を用意しなければならない。幸い500坪の農地を借りていたので、戻った直後から畑を耕した。小麦、サツマイモ、ジャガイモ、なす、キュウリ、トマト、ピーマン、えんどう、とうもろこし、かぼちゃ、すいか、にんじん、ごま、いんげん、タマネギ、長ネギ、大根、二十日大根、チシャ、白かぶ、ほうれんそう、春菊などあらゆるものを作ったという。山羊も4頭、鶏も140羽飼った。美春の苦労は並大抵のことではなかったと思うのだが、美春自身の思いは全く違った。「あの頃は全国どの家庭でも必死に頑張っておられたと思います。一生を通じて自分に一番力がついた時代、黄金時代だったと今は懐かしく思い出しております。」と受け止めているのである。何事にも感謝の念を抱き、あらゆる事柄を前向きに受け止める、美春の生き方に私は敬服する。

最後に、木谷門のその後の活躍について簡単に触れておきたい。

昭和40年代から木谷門の活躍が始まる。先ず昭和40（1965）年、大竹が首相杯争奪戦に優勝する。大竹は、昭和42（1967）年には日本棋院第1位決定戦で坂田を破り、翌昭和43（1968）年には初の同門対決となる大平修三をも退け防衛を果たしている。同タイトル戦はその後も勝ち続け7連覇を果たすのであった。更に昭和44（1969）年には十段戦も勝ち、木谷門下では初のタイトルホルダーとなる。昭和46（1971）年、石田が最年少本因坊に就き、更に昭和49（1974）年には名人をも獲得して、名人本因坊となっている。昭和51（1976）年、当時の6タイトル戦全てを木谷門下が独占する。翌昭和52（1977）年に棋聖戦が創設され7タイトル戦となるが、昭和60（1985）年にはその7タイトル戦も全て独占し、以後4年間独占し続けるのであった。木谷が育成した弟子たちが、必死に技量を磨き、その力量を遺憾なく発揮して碁界を席卷したと言っても決して過言ではない。木谷門の活躍は凄まじい。

昭和48（1973）年7月、木谷は3度目の脳溢血で倒れ、茅ヶ崎病院に入院した後、自宅療養となる。翌昭和49（1974）年、約40年間続けた木谷道場を閉鎖し、美春夫人は平塚へ引き上げていくのであった。昭和50（1975）年12月19日、大竹と石田は四谷で取材を受けていた。そこに木谷危篤の連絡が入る。直ぐに二人は平塚に向かった。平塚に到着したのは午後2時か3時頃で、木谷は小康状態であった。夕方には北九州から武久勢士も到着する。弟子たちほぼ全員が集まり、皆で木谷を看取ることができたという。享年66歳。大竹は3

日間眠ることが出来なかったと述懐する。

平塚駅近くにある「ひらしん平塚文化芸術ホール」内に、「木谷實・星のプラザ」と称する木谷に関する小さな展示コーナーがある。その展示品の中に、「先生 につっこり笑って下さい」との一節で始まる手紙があった。宛名は「故 木谷實先生」「木谷美春お母さん」の連名で、差出人は7タイトルを勝ち取った「碁聖大竹英雄、王座加藤正夫、天元石田芳夫、本因坊武宮正樹、十段小林光一、棋聖・名人趙治勲」の6人。1日でも早く偉業を報告したかったのであろう、日付はタイトル独占の日から僅か9日目の「昭和60年7月6日」であった。木谷が亡くなって約10年後のこの手紙には、木谷と美春夫人に対する感謝の気持ちが込められ、また恩返しのできた弟子たちの喜びに満ち溢れていた。手紙を読みながら、美春夫人は、きっと子供時代の弟子たちの顔を一人一人思い出していたであろう。そして、弟子の成長を静かに見守っていた木谷は、につっこり微笑んだに違いない。

(注) 最後に、参考とさせて頂いた主な書籍をご紹介します。

- ・「昭和の碁」著者・江崎誠致（発行所 株式会社立風書房）
- ・「木谷實とその時代」著者・菊池達也（発行所 株式会社棋苑図書）
- ・「木谷道場と七十人の子供たち」著者・木谷美春（発行 日本放送出版協会）
- ・「それも一局 弟子たちが語る「木谷道場」のおしえ」著者・内藤由紀子（発行所 株式会社水曜社）
- ・「石心 囲碁棋士・大竹英雄小伝」著者・井口幸久（発行所 石風社）
- ・「呉清源回想録 以文会友（新装版）」著者・呉清源（発行所 株式会社白水社）
- ・「遺恨試合」著者・石田芳夫（発行所 誠文堂新光社）
- ・「名人」著者・川端康成（発行所 株式会社新潮社）
- ・「わたしの碁」（第1巻、第2巻、第3巻）著者・木谷實（発行所 財団法人日本棋院）